

# ことばの理解を深める表現よみ

## 三色ボールペンで何が得られるか

表現よみ総合法教育研究会(表教研)

田村 利樹 (子どもと教育・2月号原稿)

### 1 読解力の低下

OECD の学力テストで、15歳の読解力が低下した事が話題になっています。この読解力は、国語科の力でいちばん基本的なものです。なぜなら、文章を読んで理解する力は、その文章(情報)を読んで、その中に何が書かれているかを自分の頭で理解し、判断し、批判をして取り入れる力だからです。

今回、この力が落ちたというのです。これは、大変、心配すべき事です。

この表現よみのシリーズが、テーマを「コトバの理解を深める表現よみ」としたのも国語教育における理解の重要性を認識してきたからでした。

### 2 読解を軽視する最近の動き

#### 【1】 学習指導要領では

まず、学習指導要領で読解を軽視した目標が出ました。

それは、どういうことかといいますと、もともと、ずっと、長い間、国語科の学習指導要領の目標は「…理解し、表現する…」だったのですが、今回の指導要領から、初めて、「…表現し、理解する…」をしてしまいました。

この「…表現し、理解する…」と、表現を理解の先に出した事は、「先ず表現、その後に理解」と、いう考えに基づくものです。この事は、別の言い方で言えば、表現(活動)を重視し、理解はその次という考え方から出たものです。

#### 【2】 教科書では

このことが、教科書の教師用指導書では、次のように現れているではありませんか。例えば、3年生の『ちいちゃんのかげおくり』(M社)ですが、ここでは、読解指導の時間がとてないのです。読解をしないで、いきなり、「音読の聞き合い」や「戦争や平和に関する物語の紹介文を書く」などの表現(活動)が展開例となっているのです。これでは、新設された総合的な学習の時間の下請けのようです。

文章の読解をしないで、朗読発表会・紹介文を書く……など表現活動先行の国語科指導、これでは、国語科の学力として大切にしてきた『コトバの力』を着けることや「文章を読む力(読解力)」は、着かなくなります。そればかりか、このような読解の学習抜きの音読は、声に出て読めば、声に出す面白さは多少あるでしょうが、内容を理解して声に出て読むのではなく、面白さが浅いものになってしまいます。ですから、表現する力も不十分なものになってしまいます。

このような読解を軽視し、活動先行の理論と方法を述べているのが、斎藤孝氏です。その主張を論文『声に出て読む…』から見てみます。

### 3 斎藤孝氏の『声に出て読む理想の国語教科書』

#### 【1】 斎藤氏の授業『人形』について…2分間の朗読を聞き、三色

##### ボールペンで線引きは読んだ事になるか

斎藤氏は、当日の授業(平成14年3月19日・平成13年度・国語施策懇談会・文化庁・国語力を高めるための具体的提言)の流れとその説明に小林秀雄の『人形』を教材にしました。これを斎藤氏が朗読をしました。2分間の斎藤氏の朗読でした。この2分間の朗読を聴き、参加者が、三色ボールペンで、面白かった箇所は緑、まあ大事な箇所は青、すごく大事な箇所は赤で引くというものでした。この時のこれに参加して、線を引いたのは、大人でしたが、バラバラの線の引き方でした。これで、作品を読んだと言えるのでしょうか。言えないと考えます。

氏は、「小学校4年生の教科書であれば、平均的な4年生でも、1, 2時間ほどで全文を読み上げる事が出来るであろう。しかも、そのおよその内容を把握することができる。その一つ一つの文章に5~7時間の授業時間をかけていることが多い。これでは子どもたちが退屈してしまう。…後略…」と、述べています。

そして、氏が主張する理解の方法とは、「教師(親)が朗読し、子どもは文章を目で追いながらそれを聞く。朗読後に子どもが文中に線を引き、それを発表するというやり方です。……中略)……それは、三色ボールペンで、大事な箇所に線を引く活動です。青が、まあ大事で、赤がすごく大事、緑が自分が面白いと思ったと

ころ、というように色分けをする。そして、それを発表させるというのです。」この方法で、シェークスピアや小林秀雄の文章がが、3年生でも理解できるというのです。（平成13年度、文化庁主催・国語施策懇談会資料・『声に出て読む理想の国語教科書』の提案・平成14年3月19日）

## 【2】『人形』の読解をこう考える…読解の過程から

初めに文章の読解過程について考えて見ます。まず、一番の基礎は、その文章で使われている文字が読めるかどうか、（ここでは、音声化に限定します。）です。これは、この文字は、どのように声に出て読むかということです。物語文や説明文などの授業では、読めないコトバ・難語句の指導と位置づけています。この指導は、欠く事ができません。次は、その文字を使って書かれたことば（語彙）には、どういう意味があるのか、つまり、そのコトバ（語彙）の理解です。そして、次は、その言葉（語彙・語句）を使って書かれた文の構造の理解です。その上で、その文の中にある意味内容の読み取りという事になります。以上のような読解に必要な要素と過程があります。

一方、子どもの読解指導では、読解をする子どもの発達との関係を常に頭に置いて、読解の指導を考えていく必要があります。このことを、斎藤氏の記述に即して見てみましょう。

この作品『人形』ですが、読解の要素・過程に照らして4年生を頭において考えて見ます。

### ① 語句の理解は読解の基礎

まず、コトバ（語彙・語句）の理解についてです。この作品には、

- ・60恰好の
- ・上品な老人
- ・・小脇
- ・・羽織って
- ・・縞柄の
- ・・着付け
- ・・褪せていた
- ・・目くばせ
- ・・もはや

- ・人形をあてがつた
- ・会釈
- ・(子どももずれで失礼とでも言いたげな)こなしであった
- ・妻の乱心を鎮める
- ・正気に返らぬ
- ・かまけて
- ・拳動
- ・鋭敏
- ・一目で事を悟り
- ・遅々として
- ・順応
- ・習慣的行為
- ・好奇心

など4年生の子どもにとっては、かなりの難しい言葉が出てきます。これらには、おかまいなしに教師が一度、朗読をしたのを聴かせて、子どもに、三色のボールペンで線を引かせるというのです。一つや二つの難しい言葉ではありません。これほど多いのですから、課題にちゃんと答えられるでしょうか。それは、無理な事です。このようなやり方の斎藤氏ですが、難語句の理解は、必要だとお考えです。それは、細君・外套・鳥打帽子には、註として意味の解説がされているからです。ですから、前述した難語句は、氏の分析では、子どもには、分かっている当たり前のコトバと認識していたのでしょう。「小学校の教科書であれば、平均的な4年生でも、1・2時間程で全文を読み上げができるであろう」と述べているのですから。

これらの難語句ですが、語句の理解は、作品を読解するには欠かせません。例えば、「60恰好の」という語句ですこのごくから、老齢期を迎えた夫婦が浮かんできます。この老齢期を迎えた夫婦の行動が、この物語を読む読者を作品に引き込むのです。30代、40代でしたらこの作品が、読み手に訴えてくるものは、極めて希薄になってしまいます。ですから、この「60恰好の」とはどういう意味か、きちんととした理解が必要で、この作品を読解する上でどうしても理解しておかなければならぬに語句です。

次の例ですが、「小脇に何か抱えて」のこの小脇も作品を引き締めている語句です。読者は、この語句からも、作品に引きつけられていきます。「ぶらさげて」や「胸の前で抱いて」などでしたら読者が、作品にひたっていく力は、薄くなります。ですから、「小脇に何か抱えて」の理解は、重要です。

こうして見ると、このように重要な語句がいくつかあるのですが、それを指導しない

で、面白かった箇所・大事な箇所に線を引かせるわけです。ですから、それで、引かれた面白かった箇所とは、本当に面白かった所でしょうか。大事な箇所でしょうか。そうではないと思います。それは、なんなく感じたあやふやなもので、線を引かなければならないから引いたというものです。これでは、文章を読んだ事になりません。以上は、語句についてです。

## ② 文の構造にふれて

次は、文の構造についてです。この文章の七行目に「着付けの方は、……唇の色も褪せていた。」の文は、主語が省略されています。いわゆる隠れ主語の文になっています。4年生の子どもでは、この主語をはっきりさせての指導は必要です。そうしないと、この場合、「何がどうしたと」か、はっきりせせることが出来ないからです。この事は、文を理解する時の基本・基礎です。このほかにも文の構造で押さえておきたい箇所はありますが、省略いたします。以上の指導を前提にして、文章の内容の指導に入ります。

## ③ 文章の内容指導…読み取ることにふれて

「或る時、大阪行きの急行の食堂車で、遅い晩飯を食べていた。」の文から、暗い夜、急行列車が進んでいく。その食堂車の中に事なのだ、街の食堂や家での食事ではない。食堂車の中は、明るい電気の照明が付いている、色々な食べ物の臭いが入り混じっている、時々、この食堂車は、がたんと音をさせてゆれるかもしれない、そのとき、コップの水がゆれるかな……など表象化しながら読み手は、この作品の中に入ります。一方では、何故、食堂車なのか？という疑問が読み手に起きます。よし、この先を読めばそれが分かるだろうと思って、先に読み進めます。先に進むと、その食堂車内での食事は、遅い晩飯とすぐに出てきます。ここでもどうして遅い晩飯かという疑問が読み手の心に自然に湧いてきます。

読み取るという事には、このように理解できるコトバ(語句)、その文・文章・から浮かぶ表象を大事にしながらする活動です。この表象を浮かべると、そこには、情感が湧き起ってきます。この文章の場合、何か、健康な家族の夕食の団欒のほつとした暖かな雰囲気がなく、とりあえず食事を取っておかなければという空気を感

じます。これが、情感です。この情感を味わい、時には、ひたるのが文学を読む楽しさもあります。

次に、このことはどういうことなのだろうかという疑問が湧いてくることがあります。こここの文では、どうして食堂車なのか、どうして遅い食事かという疑問です。この疑問をはっきりさせたい意識を持ちながら読者は、先へ読み進めていきます。

これらの学習をして子どもたちは、この物語は、或る時の夜、暗い中を走っていく急行列車とその中、遅い晩飯を食べている私などを表象化し、この物語の状況を読み取り、この作品の世界に入っていくのです。

これらのことと指導しないとこのような光景や状況は、表象化できなくて、情感化かもできません。斎藤氏の指導ではこれらをしていないのです。これでは、文章をちゃんと読めるように指導した事にはならないのです。

### 【3】 小学校教育の対象は子ども

氏は、指導要領作成に決定的な影響を与える文化審議会の国語文化会委員をしています。氏の『理想の国語教科書』では、シェクスピアの『マクベス』や漱石の『夢十夜』の第一夜などを小学校中学年から読ませるというのです。ここに、氏の子どもの読解についての認識の問題点が見えてきます。一言で言えば、子どもの発達を頭において作品を選んでいるのかという問題です。作品が、子どもに難しすぎます。氏や僕らが対象にしているのは、子どもなのです。大人ではないのです。氏は、小見出しでこれらの作品を『小学校3年生でも理解可能』と記述しています。(平成13年度・国語施策懇談会・平成14年3月19日・文化庁・国語力を高めるための具体的提言)

理解(読解)には、それをするに必要な要素があります。それは、そこに書かれている文章に関することとその文章を読む子どもの発達の2面があります。この2面からの検討が、もっと必用です。次回は、僕らの目指す表現よみについて述べます。

#### 参考文献

- 『国語教育』I (大久保忠利・三省堂・絶版、必要な方は、田村まで)
- 『表現よみ・その理論と教育実践』(田村 操編著・あゆみ出版・絶版)
- 『子どもと創る表現よみ』(田村操・田村利樹・岡摂子編著・あゆみ出版・絶版)